



索引ばっかり作ってた...

東北アジア研究センター 教授 栗 林 均

私が大学に入学した年に学部の教養科目として受講した「宗教学」担当の教授にはひとつの伝説があった。大教室で出席カードを配り終えて講義をしている最中に、後ろのドアからエスケープしていく学生を見つけると、教壇から「キミ、キミ！」と呼びかけながら後を追ひ、捕まえるまで大学構内をどこまでも追いかけて回す、というものだった。

その先生の講義は、軽快な口調で話も面白かった。楽しく聞いたであろう講義の内容も今となってはほとんど覚えていないが、不思議と忘れずに覚えている言葉がある。それは、

「研究者の中には、索引ばっかり作っている人がいるんだよね」という一言である。

数十年前の大学の講義の余談の中で発せられたもので脈絡も定かではない。おそらく、「論文を書く、学会で研究発表をする」というような表舞台で活躍する研究者たちに対して、日の当たらない縁の下で地道な作業に専念している類の研究者もいるということを対比させたものだったろう。

特別な名言でもないこの言葉が心から消えずに残っているのは、それが私自身の研究人生と重なって感じられるためかも知れない。自分の半生を「索引ばっかり作ってきた」という一言でくくってしまうには多少ためらいもあるが、索引づくりという作業が私の研究の大きな部分を占めてきたことは確かである。

■ 索引とは何ぞや？

高校や大学の教科書には、たいてい巻末に「事項索引」が付されていて、学習に関連した用語や人名、地名等の固有名詞が五十音順に配列され、本文中のページが示されている。目立たない「附録」として扱われることが多い索引であるが、重要事項を太字で際立たせたり、本文に現れる複数の個所のうち、説明の詳しい主要ページに下線を付けたり、工夫が凝らされたものも少なくない。

学生生活で索引が最も役に立つのは、教科書一冊がまるごと試験範囲となる試験の準備対策に利用できることであろう。索引の項目を見ながら、学習事項を再確認し、太字の「重要項目」を中心に、それらの定義や説明を誦じておけば、記述式試験の対策は万全である。このやり方は、一回限りの試験対策に限らず、専門分野の基礎的な知識の習得を確認するのに極めて効果的な学習法でもある。

立場を変えて、教科書や参考書を選ぶ場合には、索引があるかないか、索引がどれくらい丁寧に行われているかは、大きな判定材料となる。作り手の側からすれば索引は、手を抜こうと思えば無くても済ませられる反面、きちんとしたものを作ろうとしたら、人手も手間もかかる作業となる。索引にどれくらいの労力を注ぐことができたかは、テキスト制作全体に対する取り組み方と大きく関わっている。行き届いた索引を備えたテキストは、内容も信頼できると言う

ことができる。

一方で、文献研究にとっての「索引」は、書物など文献資料の中に使われている語句を集めてそれらの出現位置とともに配列したリストである。「人名索引」や「地名索引」は、固有名詞のリストであり、歴史の研究者に重宝される。「単語索引」や「語尾索引」は言語研究に欠かせない資料となる。ひとつの言語で使われている単語や語尾の意味や用法を明らかにするには、それらが使われているすべての場合を調査して初めて完全なものとなるからである。

ある言葉が目指す文献に使われているかどうか、使われている場合にはどこにどのような使われ方をしているか、索引が無ければ、文献のページを最初から最後まで自分でめくらなければならない。自分の力を信じて見落としが無いように努めても、見つかるかどうか、保証は無い。信頼できる索引さえあれば、調査しようとする単語や語尾が、その文献に使われているのかいないのか、使われている場合にはどこに何回現れているか、一目瞭然である。研究者にとって、これほど頼もしい助っ人はない。

単語索引は、時には「語彙」と呼ばれる。語彙というのは、特定の作品や作家、分野、領域、時代で使われる単語の総体を指す用語である。そうした語彙を書物の形にまとめたものは「レキシコン (lexicon)」と呼ばれている。有名な文学作品や作家を対象としたレキシコンは、数多く編集・出版されており、伝統的な学問分野の一つとなっていて、その方法論は辞書の編纂法とも通じている。

一つの作品（文献）の索引から、一人の作家の索引へと進み、さらには同時代の作品や作家たちへと領域を広げて多くの索引を積み重ねることによって、一つの言語の語彙を研究する確かな基礎が作られてゆく。そうした索引の集成が、言語の語彙を歴史的に記述した辞書であると言っても過言ではない。

■ 索引はどのようにして作られるのか？

索引の作り方としては、カードを使うのが伝統的なやり方であった。ある文献に現れるすべての単語を出現位置と、時には用例（文脈）とともにカードに写し、全部揃ったところでアルファベット順など決められた順序に並べ替える。近年は、この作業はコンピュータにデータを入力してプログラムでソート（配列）するというやり方にとって代わられつつある。今では、カードだけで作業をしている研究者はまれであろうが、ひと昔前まで、大学の言語関係の研究室には必ずと言っていいほど、カードボックスの引き出しを収めた棚が並んでいたものだ。図書館のカード目録と同じ... と言っても、図書館でもカードボックスをほとんど見かけることはなくなったので、今どきの学生諸君は「そんなものは知らない」と言うかもしれない。

研究室のカードボックスの中には、研究者が何十年と書き溜めた手書きのカードが何万枚、何十万枚、時には何百万枚も蓄積されているという話も少なくなかった。興味深いことに、図書館のカード目録が電子化され、端末からの図書検索に置き換わったのと時期を同じくして、研究室のカードもパソコンのデータに移行して行ったように思われる。とは言え、何万枚、何十万枚のカードを電子化するのは多大な費用（時間と労力）のかかる大事業である。過去の膨大な遺産を抱えて、途方に暮れている研究室も少なくないはずである。

■ 索引づくりと文献研究

カードを使うにしても、パソコンを使うにしても、索引づくりは原文の単語を切り出して並べ替えるという単純な作業に終始するものではない。文献（原文）を読み、解釈し、校訂する過程を経ない索引は、「魂の入っていない仏」のようなもので一番肝心な所が欠けている。どのような文献資料にも、判読の難しい表記、

誤記・脱字・^{えんじ}衍字があり、それは原文を読み解き、解釈することによってしか判別することはできない。また、書写された複数の異本があれば、それらを互いに比較対照して正しい形を決める「^{こうてい}校訂」の作業が必要になる。同じ形で意味の異なる単語（同形異義語）や、動詞の活用形のような「同じ単語の変化形」をどのように扱うかという問題にも必ず行き当たる。

独りよがりの解釈と判断を避けるためにも、先人の解釈や研究を無視することはできない。それに加えて、自分が入力したデータにも、意図しない誤記があるかも知れない（いや、必ずある）ので、入力後にデータの点検作業を欠かすことはできない、などなど…。要するに、索引作成の作業は文献研究そのものであると言っても過言ではない。

数年前に、モンゴル語のある文献資料の「電子化テキストの作成と、それに基づいた分析」をテーマにした学位論文の審査に加わったことがある。研究対象となっていたのは、モンゴル文献学の中でも古典に属する有名な作品で、これに関する専門の論文や著書も数多く、校訂本も何種類か出版されている。

学位論文は、大量のデータを自分で入力して分析を行った労作であったが、データの作成に際しては「原本の表記をそのまま電子化する」と謳っていた通り、文献研究を伴わない電子化データを目の当たりにして途方に暮れることになった。校訂作業も経ない誤字脱字もそのままのテキストから作られた索引（語彙集）は、言葉を検索し研究の材料とする目的に適ったものにはなりえないのである。

「情報処理」の観点から文献資料のデータを扱う場合には、えてしてテキストの解釈や校訂を伴う「文献研究」の発想が抜け落ちてしまいがちである。文献研究を専門とする私自身にとっても、他の分野の知識が乏しいことを自戒するべきであるが、逆の観点からすれば、こういう

所にこそ、共同研究を進め、異分野の研究が融合する可能性が横たわっているとみなすこともできる。

■ 道具を作る

中国語では索引は図書目録や辞書と同じように「工具書」と呼ばれる。学習や研究に使う「道具」としての用途と位置付けを指している。

上に述べたように索引作りのプロセスは、とりもなおさず文献研究であるが、できあがった索引は、研究者に使われ、役に立つことによって真価を発揮し、評価を受ける。平たく言えば、正確で、使い易く、役に立つのが、「よい索引」である。

役に立つかどうかは、研究目的に応じているかどうかにかかっている。索引の制作者が、どのような用途を意図しているか、研究の目的によって索引の作り方も変わってくる。

私自身に関して言えば、文献の言語の研究を行うために必要な索引のあり方を検討し、制作してきた。究極の利用者は「自分自身」であり、自分に必要で役に立つ索引を、自分が使い易いように作ることを目指してきた。発表した論文の多くは、そうした索引無くしてはできなかった研究である。

モノづくりの^{たくみ}匠たちは、新しいモノを作る際に、目的に見合った道具を自作し、自分だけの道具を揃えるという。私にとっての索引作りは、そうした道具作りに^{たと}譬えることができる。道具作りに^{ふけ}耽ったことも多々あったが、出来上がった道具が私だけでなく、^し斯学の他の研究者にとっても使い易く、役に立つものになることを信じ、願っている。

(くりばやし ひとし)